

だ だりきどう
百々力童

(石 浜)

むかし、石浜が、片葩の里と呼ばれていたこ
ろ、そこから明德寺川をへだてて、緒川村へ渡
し舟が出ていました。渡し守の長四郎さん夫婦
には、子供がなくて、毎日さみしい思いをして
おりました。

ある日のことでした。長四郎さんが、緒川村へ
人を渡して引き返してくる途中、雷をともしな
った大夕立に見まわれました。長四郎さんが、
大急ぎで舟を岸に着けようとしていますと、
「ガラガラ、ピシヤ。」



と大きな音がしたかと思うと、突然、舟の中へ

かみなり
雷かみなりが落ちてきました。

びつくりした長四郎さんが、かいを振り上げ

てなぐりつけようとしていますと、

「助けてくれ。助けてくれたら子供を授ける。」

と言います。

「ほんとか。」

「ほんとだ。立派な子供を授けてやろう。その

かわり、楠くすで舟ふねをつくり、その中なかに水みずを入れ

て、竹たけの葉はを浮うかべてくれ。」

と、必死ひっしになつてたのみます。長四郎ちようしろうさんが言いわ

れたとおりにしますと、雷かみなりは、大変喜たいへんよろこび、何度なんど

もお礼れいを言いうと、その舟ふねに乗のって天てんへ帰かえって行いきました。

それから数すうか月げつが過すぎて、ほんとうに長四郎ちようしろう

さん夫婦ふうふに元氣げんきな男おとこの子こが授さずかりました。雷神らいじん

の授さずかり子こらしく、首くびに蛇へびを巻まきつけておりま

した。長四郎ちようしろうさん夫婦ふうふは、この雷神らいじんの申もうし子こを

大切たいせつに育そだてました。

この子こは、大おおきくなるにつれて力ちからが強つよくなり、

十歳さいくらいのころには、二メートル四方しほうもある

大石おおいしを軽かる々と差さし上あげ、それを十メートル以上いじょう

も、ほうり投なげるほどの力ちから持ちになりました。投な

げる時ときに足あしをふんばった地面じめんが、十センチもめり込んで、大きな足型が出来たといひますから、それは大変たいへんな力ちからだったのでしよう。

この怪力かいりきのうわさが天皇てんのうの耳みみにも達たつし、ついに宮中きゆうちゆうのお抱え力士かかとして召し出され、「百々だだ力童りきどう」の名をたまわりました。それから、小さい子が、足をどんどん踏み鳴らしてむずがり、大人おとなを負かしてしまふことを「百々だだを踏む」と言いうようになったといふことです。